水産科学の分野で活躍する女性たち 17

Dynamic Women@Fisheries Science 17

流浪のポスドクが出産・育児を経験して

岩田 容子

東京大学大気海洋研究所

YOKO IWATA

Atmosphere and Ocean Research Institute, The University of Tokyo, Kashiwa, Chiba, 277-8564, Japan

私はこれまで自分が女性研究者であるということをあまり意識していませんでしたが、昨年出生を経験し研究を一時中断しました。研究内容や職場、家庭の状況により女性研究者が直面する問題は様々だと思いますが、一つの具体例として私の経歴を紹介させていただきたいと思います。

私は幼いころから動物が好きで、小さい頃の夢は野生動物保護官になってアフリカで働くことでした。大自然への憧れもあり北海道大学に進学、大学院では動物の行動を間近で見たいという理由で、飼育実験によるイカの繁殖行動の研究を始めました。博士課程では行動観察、遺伝子解析による父性判定、形態変異を調べることににより、ヤリイカ雄にみられる繁殖戦略に伴う種内変異を研究しました。調べれば調べるほど、実験室内で見ている行動を野外でも観察したいと思うようになりましたが、頭足類でそのような研究を行っている人は国内にはほとんどいませんでした。しかし私と近い研究を野外で行っているグループと国際学会でディスカッションする機会があり、向こうからは逆に私の飼育実験や形態学的手法に興味を持っていただき、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校生物科学科に留学することになりました。先行研究とは異なるアプローチをとっていたからこそ共同研究に発展したと言えます。留学の際はEUからマリーキュリーフェローシップをいただくことができました。世界一有名な女性研究者の名を冠するフェローシップですが、もちろん男女共に応募することができます。留学中は南アフリカ共和国で野外調査を行い、イギリスで分析やデータ解析を行っていました。南アフリカのフィールドはとにかくよく荒れる海で、信じられないほど揺れる小型ボートで産卵場所を探したり釣りやダイビングをしたりします。時化の日は国立公園に野生動物を見に行ったりもしました。すべてがワイルドでおおらかなアフリカ流のやり方に戸惑うことも多々ありましたが、とても気のいい共同研究者に恵まれたたくさんの貴重な経験をすることができ、子供の頃の夢が概ねかなったような気持ちでした。

2010年春に日本学術振興会の特別研究員に採用され、春は日本のイカを、秋はアフリカのイカを、冬は

アメリカのイカを調査し、冬の間はイギリスの大学に数カ月滞在するというジプシーのような研究生活を始めました。しかしそんなジプシー生活は妊娠を機に定住生活になり、出産・育児のために2012年1月～2013年3月まで仕事を中断しました。女性研究者にとっていつ出産するかというのは最も悩ましい問題ではないでしょうか。学振の特別研究員は採用期間が3年とポスドクとしては比較的長いこと、出産・育児のための採用中断制度があること、独立して自分のプロジェクトを行う立場であるため中断することで周囲に与える影響が少ないことから、思い切って中断することができました。とはいえ、予定していた海外調査を中止するなど研究計画は大きく変更することになり、また研究の進展が遅れることで共同研究者には迷惑をおかけしました。2012年春の水産学会では光栄にも水産学奨励賞をいただきましたが、出産直後だったため受賞講演すらキャンセルさせていただきました。しかし私の周囲の方々は理解のある方ばかりで、調査に行けない私の代わりにサンプルを採集してくれたり、たくさんの応援の言葉をいただいたりしました。

若手研究者は大学院卒業後数年間は、任期付きの立場で研究を行うことが多いでしょう。採用期間が1年ごとの更新といった場合も多く、安定した職に就き研究を続けるためにも成果をあげることに必死な時期です。たとえ育児休業制度があっても取ることが難しいと感じてしまう方もいるかもしれません。私が育休中に最も辛かったのは、睡眠不足でも夜泣きでもなく、論文を書かなければというプレッシャーとその時間をとれないフラストレーションでした。復職後も研究に使える時間はこれまでより限られるでしょう。また、長期出張を伴う野外調査は行きづらくなるなど、これまでの研究スタイルを大きく変えなくてはなりません。しかし、実はこのような問題は、育児との両立の場面だけではなく、男女問わず様々な状況で起こりうるのでは無いですか。就職すれば研究以外の業務は年々増え、研究に使える時間は短く細切れになりますし、所属が変わるなど研究テーマやスタイルを変更しなければならない場合は多々あります。限られた時間に集中して研究する能力・柔軟に研究計画をたてる能力は研究者なら誰にでも求められる能力でしょう。私の場合、留学中に新たに始めた研究でイカの精子に明確な形態的種内二型を発見したことは幸いでした。配偶子に明確な二型があるというのはすべての生物種の中でも初めての発見で、実験室ベースで行うことのできる新たな研究テーマがいくつも生まれたことにより、ポジティブに研究計画を変更することができました。これを書いている現在、育休後の職場復帰を間近に控え、これからが研究者としての実力を問われる時だと身の引き締まる思いです。